第３回富山親学フォーラム
日時：平成 16 年 11 月７日（日）午後 15：50～17：20
会場：富山第一ホテル　春日の間
ワークショップ
「幼年期の教育」～脳を育む教育の基礎・基本
明星大学教授　高橋史朗氏

（進行役）　それではみなさま、本日はお忙しいところ「第３回富山親学フォーラム」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。そうしましたらお時間ですのでそろそろ始めさせていただきたいと思います。
基調講演、１時半過ぎから始まりまして少し長いお時間となりますけれども、是非リラックスしていただきまして、高橋先生と充実したお時間をお過ごしいただけることを願っております。それでは高橋先生、どうぞよろしくお願いいたします。

（高橋）　はい。それでは最初に少し、本来基調講演で話す予定だった後半の部分を少しお話させていただいて、その後皆さんと意見交換をさせていただきたいと思います。あるいは、皆さんからあらかじめ頂いている質問もありますので、そのあとその質問にもお答えしたいと思っております。
まず、今日の基調講演の後半部分をちょっとご覧頂きたいんでございますが、今日このワークショップの中で特に「ＰＱ」のお話をしたいと思っておりましたが、「ＰＱの諸要素と育成のポイント」という、そこのところからちょっと補足をさせていただきます。
この「ＰＱ」…「人格的知性」訳されるわけですけれど、それをどういうふうに育てていけばいいかということについて、これは脳科学者がどういうアドバイスをしているかという、脳科学者の立場ということですので。まずフィニアス・ゲイジというアメリカ人が、事故で前頭連合野を損傷しまして、何を失ったかというとそこにあります…それが諸要素に繋がるんですが、「将来に向けた計画・夢」を失ったんですね。それから「理性」を失いました。「社会性」を失いました。「主体性・独創性」を失いました。「集中力・探求心・好奇心」を失った。それからおもしろいのは「幸福感」を失った。「達成感」というものを失った。これらが前頭連合野の知性に関わってくるものですね。
じゃあ、それをどうやって育てるかという育成のポイントとして、１番から８番まで私が書いてあります。まず１番のポイントは「夢や目標を持たせる」ということですね。２番目は「多様な人間関係・社会関係を体験させる」ということですね。この中に幼稚園や保育所の関係者いますか？はい、いらっしゃいますね。カール・フリグラレという人が『人生に必要な知恵は、全て幼稚園の砂場で学んだ』という本を書いていますが、なぜ人生に必要な知恵を幼稚園の砂場で学ぶか。それは、多様な人間関係を体験するからであります。

一人遊び…一人っ子で、なかなか集団遊びに参加できない子がいますけれども、多様な人間関係・社会関係を体験させることがＰＱを育てると。３番目が「直接体験」ですね。原体験…疑似体験ではなくて本物に触れるという体験です。私今、日の出を毎日見ていると言いましたけれども、これなんか直接体験です。大人は誰でも日の出を見ることができるんですけれども、ほとんど見ていません。私達の周りに感動できる直接体験…いっぱいあるんですけれども、私達自身がそれをしていないんですね。直接体験－原体験がＰＱを育てる。４番目は「自分が選んだ体験」と。これもなかなか面白いんですが、人から押しつけれられた体験ではなくて、自分がこれをしたいという体験を成功させて、成就感・達成感を体験することがＰＱを育てると。この良い例は、兵庫県で「トライアル・ウィーク」という体験活動が、阪神・淡路大震災を期に中学２年生全員が、地域の５日間の体験活動をやったんですね。不登校児は全員第１希望が優先されました。その結果、５日間不登校児が地域で体験活動をすることによって、78%の不登校児が再登校したんです。ところが２週間中学校で授業を受けているうちに、登校率が 34%に落ちてしまいました。つまり自分が選んだ体験を成功する体験によって、心の扉が開いて、心のエネルギー源になって再登校できるんですけれども、受け身の授業を受けているうちにだんだんまたその 意欲は低下して、78%から 34%に登校率が落ちてしまったと。これも自分が選んだ体験というものが、人格的知性を育むという例として言えると思うんですね。５番目は「読書」であります。特に「音読」というところに注目してもらいたいんですね。この事を一番研究している方は、東北大学の川島隆太という先生です。本屋さんに行けばこの方の本が数冊積んでありますね。すごいこの方今有名になっています、引っ張りだこの先生ですね。それで音読しているのと黙読しているので、脳が全然活性化の度合いが違うんですね。これは映像で見ることができます。音読することによってどれだけ脳が活性化しているかというのは、カラーの脳の測定図ではっきり出ているんですね。そして、美しい文章に触れる・美しい言葉に触れる。特に日本語ですね。今小さい頃から英語という動きがありますが、まず美しい日本語に触れさせるということが大事なポイントです。例えば保育の現場で「立腰（リツヨウ）教育」というのをやっている保育所へ行きましたら、３歳の子が漢詩を暗唱して、みんなの前で読んでました。僕のゼミの学生が決して読めない漢詩を、スラスラと読んでおりました。意味が知的に理解できなくてもいいんです。頭でわかることではなくて「言霊」という…「言霊信仰」というのを日本人は持っておりましたが。言葉には響きがあります、その美しい言葉というものを音読することによって脳が活性化される。知的理解は後でいいんですね。それから次が「暗算」ですね。「暗算」これは川島さんがこの間、テレビでもやってましたね。痴呆症老人にも暗算が、痴呆症を回復するために役に立つということを言っておりましたが、暗算…これもＰＱを育てると。こう見てきますとね、「ＩＱ」と「ＰＱ」も重なっているなと。「読書」とか「読み・書き・そろばん」というのが「ＩＱ」のベースですから。「ＰＱ」と「ＩＱ」は全然別のものじゃなくて、重なっているなということがわかるんですけれども。７番目が、私が一番興味を持っているところでここには「幼

児」と書いてありますが「乳幼児」です。正確にはね。乳幼児の世話をすることが「ＰＱ」を育てると脳科学者が言っているんですね。つまり、子守歌を歌う…これは有名なエピソードがあるんですけれども 、中学生がボランティア活動で保育所に行った。ところがどう関わっていいかわからなかったら 、子供の方からよってきて「あそぶかー？」と言ってきた。その単刀直入な言葉にとても感激して、大人の変なやり取りのないですね。そしてシャボン玉を飛ばしながら、非常に幸せそうに遊んでいる子供を見てとても幸せだった。「僕も昔はこうだったと」。中学生になってひねているわけじゃないんでしょうが、幸せの原点のようなものに帰ったわけですね。つまり乳幼児と触れることによって、私達が幸せを感じる…つまり幸福感の源が乳幼児との関わりの中で感じる、そういうふうにできている 。ところがその乳幼児との関係を、今どんどん外注化しているところがありますよね 。そのことによって、逆に母が母になる、父が父になる…つまり母性・父性というものが育つきっかけを、チャンスを失っているということにもなっているんじゃないか 。８番目は「野外キャンプ」です。それから、ちょっと資料があるので座らせてもらいますが 、その時に「村上和雄」と書いてありますが、これはおもしろいんですよ 。吉本興業の「Ｂ＆Ｂ」という漫才のチームを呼んでですね、国際大会で発表したんですけれども 。１日目は堅苦しい講義を聞かせたんです。２日目は「Ｂ＆Ｂ」の漫才を聞かせたんです。そしたら糖尿病患者の血糖値が、ドーンと下がったと言うんです。これを国際大会で…学会で発表していますからね、嘘じゃないんです。つまり「笑い」というものが、血糖値を下げる。「笑い」というものが、どんなに人間の心のスイッチをオンにするかというですね、そういうことを科学的に解明しているんですね。この方が書いたのをちょっと 読ませていただきますとね、こういう事を書いてますね。「思いが遺伝子の働きを変える」と言っているんですね。「楽しい・うれしい・喜び・感動・感謝・信念などによって、よい遺伝子がオンになる」と。ということは、親や教育者が毎日、楽しい・うれしい・喜んでいる・感動している・感謝している・信念を持っている。この「信念」というのも大事なんですね。

今日私が、「師範塾」の例で申し上げた、13 年連続陸上競技で優勝させているという先生は「一寸先は光」といつも言っています。子供達に…中学生にですね。「一寸先は光」という根拠はありません、普通は「一寸先は闇」です。「一寸先は光」というのは、彼の信念なんですけれども、それがもう、中学生のなかに「一寸先は光」と…こうもう信念が伝染しているんですね。それを村上先生は、こういう表現をしています。「自分の信念を、どこまでも強く貫き通し努力を続けている時、天の味方がやってくる。幸運は努力の結果準備された心におりてくる 」と…こういう表現なんですね。僕「松下政経塾」で松下幸之助さんが「運があるか、愛嬌があるか」というのを、言葉を交わさない面接で決められたのを、ずーっとわからなかったんです 。何で言葉を交わさないで「運」がわかったんだと 。皆さんを見ていて愛嬌くらいは僕にもわかりますよ、そのうち。でも「運」は全然わかりません。幸之助さんは、何で言葉を交わさない面接で「運」がわかったのか、僕は 10 何年わかりませんでした、実感できなかった。ところが、政経塾制度にずーっと関わってきて、もう 30

人以上国会議員になっていますけれども、だんだんわかってきたのは、彼らは決して恵まれた環境の中で必ずしも育ってきていないんですが…失敗や挫折もしているんですけれども、前向きの信念を持っているんですね。自分の心の姿勢とか生き方がプラス志向なんですね。その心の姿勢やプラス志向が、幸運を引き寄せているんです。信念があるところには、この村上さんの言葉をかりれば「幸運は努力の結果準備された心」…つまり信念を持っているとか、あきらめないとか、きっと何か必ず良くなるとか、そういうふうに信じている人の心に幸運はおりてくるんだと。つまり、幸運はたまたまラッキーに恵まれたんじゃなくて、その心におりてくるんだと。ならば親や教育者が、そういう心を持っていて、それを実践していて、その子供達に肯定的な言葉を発していくことが大事なんじゃないかと。眠っている遺伝子を…オフをオンにするものは、そういうものじゃないかと思ったんですね。

それからこういう事も書いてますね。「苦しみもそれを克服できれば、良い遺伝子がオンになる」と。だから、飢餓状態というのも大事なんだと。今、私達全部恵まれてますよね。恵まれているから「ありがたい」と思わないわけですけれども。「ストリート・チルドレン」のお会いになると目は輝いてますよ、オーラは出てます、いきいきしていますよ。それはおそらく、周りの人達が温かく接しているからだと僕は思います。そうでないところも勿論ありますけれども。逆に恵まれたことによって、心がオフになってしまっている。そういうのが日本の子供達の姿かも知れませんね。そのことをちょっと、村上和雄さんの例として補足させていただきますね。

それから、最後の４番で申し上げたかったことは、「親が変われば子が変わる」という、本来一番ここを大事にしなければならなかったんですが…。「親学」のキーワードは、「主体変容」ということです。「主体」は教育をする主体ということです、親であり教育者ですけれども。子供を変えようという…対象である、客体である子供を変える事じゃなくて、教育者…教育をする主体が変わること。それが一番大事な事だと。ヨーロッパの親たちと日本の親たちの決定的な違いはここにあると思っているんですが、「家庭で子供を育てる権利がある」とこういう言葉を、僕は日本では聞いたことがないですね。ヨーロッパやアメリカでは聞きますよ。「家庭で子供を育てる権利・義務・責任」という意識ですね。これは実際に、アイルランドとかデンマークは「家庭義務教育制度」というのを法律で定めているんですね。「教育義務」という、親が家庭で教育をする義務があるという…こういう考え方。あるいは子供を抱く権利がある、子供を抱きしめる権利がある…という発想は日本では、僕は聞いたことがないです。日本の発想は「修学の義務」、学校に通わせる義務です。自分たちが教育する義務じゃなくて学校で授業を受けさせる。そういう親の意識というものの違いをですね、私は感じています。親の意識改革・意識転換が必要じゃないかと、自分たちの責任という意識ですね。

あるいは、親が変わるということは３つのポイントがあると。まず子供観が変わること…子供の見方が変わることですね。２番目は子供へのかかわり方が変わること。３番目は親

自身の心の姿勢や生き方が変わることと。もちろん、この３つ全部難しいんですけれども、まず子供観が変わるということについては、人格と行為を区別するということが大事だと思っています。いつも私が例に出すのが、乙武君の『五体不満足』の話をするんですけれども。『五体不満足』読まれた方、どのくらいいらっしゃいますか？はい、ほとんど読まれているんですが、あの本の中で乙武君のお母さんは、１ヶ月たって我が子と対面して…乙武君と会って「かわいい」と言ったと書いてあります。重い障害を持った我が子を見て、本当は涙がボロボロ流れたり、かわいそうにと思うのが普通の親ですけれども「かわいい」とおっしゃった。それは命の本質を見たんだと思うんです。子供をどう見るか、親が子供をどう見ているかによって子供は親に接し方が変わっていきます。子供を信じていなければ…不信感を持っていれば不信感を持って子供は接してきます。本当に信じているか、信じていないか。これは子供を親がどう見ているかっていう見方によって、子供の親に対する態度は変わってくるわけですね。
その時に、これは私が全国の教育現場をずっと回るようになって「何が子供を変えるのか」ということから考えよう、というふうになって一番学んだのは…これは１回目・２回目にはお話をした事があるかもしれませんが、横浜にある『仏教慈徳学園』というところで、全身入れ墨しているような非行少年が、「銘石」という自然石の傷を毎日６時間磨いています。とても不思議な光景です。極悪非道の非行少年ですが、その石の傷を毎日磨きながら…これ「流汗悟道」です。今日の『イエローハット』の鍵山先生はトイレ掃除ですけれども、荒れた…今東京の高校がトイレ掃除によって立ち直っています。トイレを手で掃除する、そのトイレを手で掃除をしながら実は自分の心を掃除する。汗を流すという体験によって道に気付く「悟道」。教育界がなぜ対立するかというと、大人が子供に何を教えるかという「教」の視点で考えるとイデオロギーが対立します。例えば道徳教育について、道徳は上から価値観を強制するものだという反対がありますよね。それは「教」の立場からです。しかし何が大事かといえば「育」の視点ですね。何が子供の心の扉を開くのか、何が遺伝子にスイッチオンになって心のエネルギー源になるのか、何が子供のアイデンティティを形成するのか。あるいは心や感性を育てるのかという、この視点に立つことがイデオロギー対立を超えることになるんですね。「道を教える」ことではなくて「道に気付かせる」こと…「悟道」は気付かせることです。そして体験を通して自分が実感するということです。いつも僕は英語で「アンダースタンド」と「リアライズ」で区別をしているんですけれども、「わかる」という時にわかり方がふたとおりあって、こちらは「頭でわかる」ということです。こちらは「魂でわかる」ということなんです。今「生命が大事だ」という教育をこっちでやってきた。命が大事だということを、いくら頭で教えても子供の心は変わりません。こちらは痛みや悲しみというものを、自分がポロポロ涙を流して…共に涙を流す、実感を伴ってそれを体験するということが「涙がわかる」ということです。「わかる」というのは、魂や心でわかるということです。その魂や心でわかるという痛みや悲しみというものは、小さい頃に育てる必要が特に大事だということを、今日は冒頭で強調したか

ったんですね。
それから次のかかわり方。2番目はかかわり方を変えることだといいましたが、これは「しっかり抱く」という段階と「下におろす」という段階と「歩かせる」という段階があるということを申し上げました。今日最後の方、あまり意見を言う時間が、パネルディスカッションでなかったんですけれども 、教育は他律から自律へと導く営みだということを 確認する必要があると思うんです。最終的には自律へと導いていく必要があるんですが、いっぺんに子供は自律できないんです。他律から始まって自律へと導いていくんです。まず小さい時には、今日僕が申し上げた「守」ですね、「守る」。人間教育の基礎・基本というものを教えなければなりません。その人間教育の基礎・基本を型を通して気付かせる。「型」というものを教えると「押しつけ教育だ」という方がいるので、教育は混乱…これを「誤った児童中心主義」と言います。今アメリカもイギリスもフランスも教育改革の提言を読んでいると、全部「誤った児童中心主義」の反省というのが明記されています。「誤った児童中心主義」というのはどういう 事かというと、児童の最善の利益を考慮しなければいけないんですが、それは児童の目先の利益を保証することではないんです 。子供のわがままと対決する、自分で自分を律するような自分というものを育てる事が、児童の最善の利益になる。例えば「自由」という言葉を日本ははき違えてきました。「自由」というのは、元々「自らに由来する」と言う意味なんです。「自らに依る」ということなんです。どういう事かというと、苦しい時・悲しい時に自分を支えるものを、自分の中に確立するという 事なんです、それが自由になるということなんです 。自分を束縛しているものから 解放されることが自由だ、と私達は考えてきました。しかし、それは「市民的自由」と言うんですけれども…もう１つの自由は「精神的自由」。「自由」っていうのは、英語で辞書で…英英辞典でひいてみると、皆さんの知らない言葉が出てきます。「サルベーション 」「ニルヴァーナ」と、僕も実は辞書を引いて初めて知ったんですが。どういう意味かとひいてみると、「サルベーション」というのはこう書いてありました…英英辞典ですけれども。「おぼれている人を下から潜っていって救い出すこと」。「えっ、自由ってそういうこと ？」とビックリしたんですね。それから「ニルヴァーナ」っていう、こういう英語がありましたね。「ニルヴァーナ」っていうのは「涅槃」だと。お釈迦さんが亡くなった時に「涅槃図」という…わかりますかね「解脱」、魂が解放される、自由になるということです。つまり心の自由を得ること。自分をコントロールできるようになって、まず自尊感情を持って自己発見。つまり、何でこんな話をしているかというと 、石磨きを通してまず「自己発見」させる。これが優しい心そを育てる出発点なんですね。自己発見をしたらこっから 「セルフ・エスティーム」と言いますが「自己尊重」、自分を尊重する心が…「自尊感情」が育まれます。それがあって初めて自分が自分を律するという「セルフコントロール」「自己統御」ができるようになる。それがあって初めて「自己実現」ができるんですね。だからそのプロセスを抜きにして、自律だ、自己実現だといってもそれは空しいんですね。まずは、そのオンリー・ワン存在価値を自己発見させるという …そのことが大事です。そして、自分の中に苦しい

時に自分を支える、そういう本当の自分…強い自分。そういうものを確立することが、実は「自由になる」という事でですね、そのためには葛藤が必要なんです。友達親子ではダメなんです。これは時々誤解されますが、保積隆信さんの『積み木崩し』という本が昔ありましたね。娘は反抗していて、急に門限を作ったわけです。そしたら猛烈に反発しました。「今まで自由だったのに、何で門限を作ったの？」ところがその門限を作ることによって、大きな葛藤を経て親子の絆が深まりました。つまり、葛藤するということがあって、自分で自分が律すれるように…自律というものがある。親子が子供に媚びて、何でも子供のいうとおりになってしまうことが 平等ということではないんですね。だからいい意味で葛藤があること、そのことが子供が自律していくために、必要不可欠のものだということですね。
それから大事なことは、心を通わせる…子供と心を通わせる、心の温もりですね、それが幸せということの原点ではないかということ。僕は幸福のものさしが狂い始めたんじゃないかというふうに思っております。これは特に、幼稚園や保育園の先生方にいろいろ僕がお話ししている事の１つに、今少子化対策とか子育て支援策というものが、幸福論ではなくて経済効率…経済論で考えられているんじゃないかと。そうすると、子供は荷物預かり

と同じような存在になっちゃってですね、大人の便利で…大人の都合でどんどん駅前保育所ができ、そして保育サービスの充実ということがどんどん拡大していきますが、そうすると保育サービスを選ぶ側に親が回ってしまいます。親がお客さんになってしまいます。それでいいんだろうか？家庭で子供を育てる権利がある、第一次的責任は親にある…これが一番大事な「親学」の根本ですよね。でも、どんどんそれを親以外の方が担おうとすればするほど、親の責任意識が薄れていって、そして親と子の絆がどんどん崩壊してしまう…そういうジレンマがあるわけですね。ですから、そういうものが持っている中で、今日自分の自由時間が奪われると、そういう女性が増えてきたといいました。私の母親の母親は、12 人の子供を産みました。11 人女・１人男、ちょっと珍しい…お寺出身なもんですから、本堂にいつも 12 人並んで写真を撮っていると、どれが母親かもう見分けるのに大変なくらいな。そのおばあちゃんが、子育てにイライラしているという顔を見たことがありません。僕は夏休みに、お寺が大好きでいつもお寺で過ごしていたんですが、もちろん孫である私の見えないところで、いろいろ苦労をしていたのかもしれませんが。今たった１人でもイライラしている親はたくさんいますよね。それは子育ての意義とか喜びとか、その子育てに対する…子育ては自分の自由時間を奪われるという、自分の自己実現の人生に邪魔になるというそういう意識とおばあちゃんの意識は全然違う。そうすると、もっと子育ての意義や喜びを実感できるような場をたくさん作っていって、「親学」の拠点を地域社会に作っていかないといけないんじゃないか。今まで、幼稚園・保育所は子供をどうするかということでしたが、これからは子供だけじゃなくて親と子が共に育つ場というものをどう作っていくのか、そして親心が育つような幼稚園・保育所をどうしていけばいいのか。

つまり親の子育て力をどう向上させるか、親としての育ちをどう支援するか。親の肩代わりをするんじゃなくて、そういうことが大事な役割になってくるんじゃないか、そんな風に思っています。
それから、心の姿勢・生き方が変わると言うことは今大体申し上げたことに繋がる…マイナス思考からプラス志向へという、減点主義から要点志向へという、そういうことですかね。よくコップに例えます。7分目入ってるとすれば70点も入ってると思う人もいれば30点足りないと思う人もいるか、その見方の違いです。0点を取った人に、お母さん方がよく…0点を取ってきたら「もうよくなるしかない」と言って赤飯を炊いてくださいと言うんですが、最近の人はほとんど耳を傾けません。何をおめでたい話をしているんだと。僕は結構本気でそういっているんですが、0点よりマイナスは取りようがないんだから0点を取ったと言うことは、もうよくなるしかないと。本気でそう思ったらそう伝えてください。子供は半分冗談だと思っても、随分心がリラックスするでしょう。そういう減点主義で、次々否定的な言葉で叱っていくという…これを「ストローク」と言いますね。「バーバル・コミュニケーション」という言葉のコミュニケーションよりも「ノン・バーバル・コミュニケーション」のほうが遙かにコミュニケーションの中では高い割合を占めているんです。9割以上はノン・バーバル…つまり皆さんの言葉、喋っていることじゃなくて、表情とか雰囲気とか目の輝きとかですね。今日「無財の七施」の中で「心施」と「言辞施」は言いましたが、今日ここにお集まりになった方達のために、あと1つだけ言っておきましょうね。それでそろそろ皆さんの質問に移りたいと思いますが。無財の七施は、まず「和顔施」ですね、にこやかな顔ですね。これ表情ですね、にこやかな顔で接しているか。これお金いりませんね。それから「眼施」。あったかいまなざしを子供に向けているか、冷たいまなざしを向けているか。僕今度12月に、埼玉県のある大麻をずっとみんなが吸っていたという高校へ講演に行くんですが、先生にお会いしたら半分が中退しているんです、半分ですよ。それでもう「全然話を聞く気がありません。ですから、きっと先生が来てもみんな全然聞かないでしょうけれども、先生どうか許してください」。先生方の心がもう、非常にしらけているといいますか、さめているんですね。もちろん、生徒の現実に格闘しておられて、どうにもならないところでさめておられるんですが、あったかいまなざしを持っていない、あきらめているんです。最初からあきらめている。僕はそういう学校によく行きます。最初の5分はやはりダメですね、しかし10分かかりません。ピシッとこちらを見てもらうためには、その学校に応じてどういう状況かあらかじめよく聞いておいて、どういう言葉が子供達の心の琴線に入っていくか、それを自分なりに考えて心を伝える。まさに今日言いました「心施」ですね。心を込めて心を尽くして心を伝える。それは状況によって言葉を考えていかないと、どんな話がいいかはその子達が持っている、どういうふうに生きているかを全部考えて考えないと、なかなかうまくいきませんけれども。心を込めて心を尽くして心を伝えるということに徹することによってこっちを向きます。終わった後先生と話をすると「今日はたまたまみんな見てましたけれど、もうこれからは元の木

阿弥ですよ」と、先生が諦めちゃってるわけです。それはもう、あったかいまなざしがないですね、みんな堅い顔をして、しかめっつらですね。次は「言辞施」と「心施」はもう言いましたね。あとは、体を施す「身施」です。ただ言葉を言うだけじゃなくて、自分が出向いていって、家庭訪問をして話をしたという、これまさに「身施」ですね。それから「座施」お先にどうぞと譲る精神ですね。まず、俺がという自分中心の世界になっていますので、譲ると言うことを実践していく。それから「おく施」ですね。「おく施」は家に泊めてあげて一汁一菜をごちそうするというのが、元々の意味なんですけれども。僕の父は荒れた工業高校の教師で、中退が職員会議で決まった子を６ヶ月、おく施しました。生活を一緒にしました。僕ら兄弟６人はとっても嫌でした。突然怖いお兄ちゃんが入ってきてですね、「何でだ」と思ったんです。でもその子は今、『東芝』の重役になっていますね。もう社会で大活躍しています。それだけのことをやる人がいれば、１人の人生を変えちゃうんだなあという、大変深い感動がありました。

それから、４番に「育」の視点から教育のパラダイム転換を。これ今言いましたね。僕は矢印の所に書いてるように「子供に温かい心を育む運動を」。「親学」というのは「親が変われば子供が変わる」というのは、まず親があったかい心を取り戻して、そのあったかい心を子供達の中に育てていく国民運動じゃないかと、実は思っています。それは今、テロでですね憎しみの連鎖が続いています。あるいは最近の性意識・性行動の変化を見ていると、いろんな性的なトラウマというものの犠牲者だという気がしてなりません。例えば援助交際をしている女子高生の周りには何人もの中年男性がいます。そういうふうに考えてくると、それは様々な悪循環、連鎖というものがどうしても断ち切れない。その中で傷つき傷つけられる関係…そういうものが続いてる。その連鎖を断ち切るためには、痛みを感じるあったかい心というものを育てる以外にないんじゃないかと。これはペスタロッチという方がこういう事を言ったんですけれども「人類から戦争をなくす唯一の道は、母と子のスキンシップを回復するしかない」と、ここまでペスタロッチは断言したんですね。つまり「戦争」という民族間における憎悪の根本ですら、実は母から充分な愛情と信頼を受けなかったというその愛着不足、それがやがて大きな民族間の憎悪にまで広がっていると考えているんだと思うんですけれども。とにかくあったかい心を育むことが、今国際的にいろいろ問題になっている戦争とか差別とか…様々な問題に繋がってくる一番大事な事じゃないかと思っています。

「親学の拠点を構築しよう」。これは「親が変われば子が変わる」というのはそのとおりですけれども、あとの皆さんの質問にもあるんですが、わかっているけれどもなかなか変われないと。今日のような場に来られると、しばらくは持つんですけれども１週間、10日１ヶ月たつと元の木阿弥と。あの時何に感動したんだっけと…とこういうふうになっちゃう。いっぺんに変わることはできません、ちょっとずつ変わっていくしかないわけですね。僕は道元という人が好きなんですけれども、「百千万発発心せよ」といいました。宗教の専門家ではありませんから専門的な説明はできませんが、僕自身はこれを語れば長くなっちゃ

うのでやめますけれども、高校時代非常に悩みまして、自分自身に非常に否定的でした。「お前なんか早く死んだ方がいい」と自分の価値を全然認められなくて暗い人生でした。「バカ野郎」の連続で、僕の日記はとても暗い高校生の日記です。でもそれが、もう嫌で嫌で仕方なくて、何とか生まれ変わりたいと熱烈に思いました。そして20歳の誕生日の日までに、なんとか生まれ変わりたいと願を立てて…発心して、自分が生まれ変わりたいと発心をして、６ヶ月前に朝３時に、僕が流した…自分でふき込んだ肯定的な言葉ですね、自分が元気になる言葉ってあるでしょう？それを片っ端からふき込んで、それで、それを３時になるとタイムスイッチで、だーっと…これ危うい世界ですよ、自分の声で、朦朧としている時に聞こえて来るわけですから。それを徹底的に半年間、僕はやりました。つまらない授業はいっさい無視してテープで自分の声を聞いていました。潜在意識はもうまさに自己変革ですね、自分を変えるためにそういうことをやったんですけれども 。そして誕生日にはできませんでしたけれども 、誕生日から５日たった時に、じーっと自分をあったかい目で見つめてる自分を初めて発見しました。「お前はそんなに冷たい人間じゃない。そんなに愚かな人間じゃない。つまらない人間じゃないぞ」という事を、言葉じゃなくて眼差しを感じたんですね。「ああ、こっちが僕だ」と。これは１つの小さな「小悟」仏教では「小悟」…小さな悟りといいますが、小さな悟りだったと思うんですね。でもその時は、もう本当に「やった」と思いましたよ。僕は自分で本当に生まれ変われたと思ったんですが、しばらくしたらまた元に戻ります。また「ああ～」と。でもいつもそこに帰っていく、そこの原点に返ればいいんだと。百千万発…元気を失ったらまたあの時の元気に戻ればいいんだと、百千万発これを繰り返しながら、ちょっとずつ小さな悟りを深めていって、そうして本当の自信に持続する、喜びや自信になっていけばいいんだと …そんな思いでいます。ですから「親学」というのも、いつかまた同じような悩みや、挫折や失敗を繰り返しながら、自己嫌悪に陥りながら…絶えず自己嫌悪と戦いながら百千万発発心していく場があれば。そのために東京ではまず、１回目は悩みや愚痴を聞くということをやります。そうして、今日のようにお集まりになっている方はほとんど、本当は私の話を必要としていない方が多い。本当に必要な方はなかなか来られない。それは「こうあるべき」と言われると、自分が責められるのが嫌だというのがありますよね。だから、弱みや愚痴をみんなで言い合う。弱みや愚痴を言い合うだけで結構救われるんです。立派な話を聞かなくても、「それはこうしたらいいんじゃないの？」「ああしたらいいんじゃないの？」と言いながらですね、いろいろと心が楽になっていくものですよね。それをやって次は「ドラマ・セラピー」というのをやるんですけれども 。不登校の子供を持っている方には、不登校の子供の役をしてもらって、ロールプレイをやるんですね。「どうして、あなた学校へ行かないの？」と。子供の立場で必死になって親が答える。後からふっと「ああ、そういう事か」と気付かせる。これも「気付かせる」というワークショップなんですけれども。そういうことを毎月やりながら、ちょっとずつ気付いていって、心が定着していくわけですよね。ですからこの富山の「親学フォーラム」は浦山学園が中心になって毎年やって、これで３回目ですよ

ね。でリーピーターの方が 35%位いらっしゃると聞いて、やっぱりこういう積み重ねの中で、だんだん本当の気付きになっていくんだと 思うんです。そしてこれが、年一回のイベントで終わらないでそれをさらに 地域に根ざした親学の小さな場を次々に作っていって、それが幼稚園・保育所でもそうであるし、様々なところで、そういう「親学」の拠点を築きながら、気付きの場をたくさん作っていくという「場作り」がやっぱりないと、「場」がないとなかなか気付きが連続しないものですからね。そういうことを考えていければと思っています。

それから、「子は親の鏡」というのは、一番僕が気に入っているもので、これだけはちょっと読ませていただいて、皆さんの質問に移りましょうね。今日のお配りしたものの最後のページだと思いますので、ちょっと見ていただけますか。「子は親の鏡」ですね。ありますか？その横に、小・中学生のアンケートの事が書いてありますけれども、「疲れた」と思うと答えた小・中学生が８割ですね。６割前後の小・中学生は「自分はいつかキレてしまう事があるのでは」とこう思うと。「最近１～２ヶ月で心を打たれた感動があったか」と、過半数が「ない」と答えている。これが今の現状ですよね。さてそういう中で、「子は親の鏡」これを読んで話を終わります。「子は親の鏡。けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる。とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる。不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる。「かわいそうな子だ」と言ってそだてると、子どもはみじめな気持ちになる。子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる。親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる。叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう。励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる。広い心で接すれば、キレる子どもにはならない。誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ。愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ。認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる。見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる。分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ。親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る。子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ。やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ。守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ。和気あいあいとした家庭で育てば、子どもはこの世の中はいいところだと思えるようになる」僕はこれを一言で表せば、こういう事だと思っているんです。「化育」という言葉をご存知ですかね？感化することによって育てるということです。教え込む事じゃなくて、これは『中庸』という古典に「天地の化育にさんずる」という言葉があるんですが、これを江戸時代の幼年教育では非常に大事にしたんですが。「化育」化して…感化して育てる、教え込むんじゃなくて。その生き方を通して後ろ姿から気付かせるという、そういう感化という、化して育てるという、それが大事じゃないかと思っております。以上ちょっと長くなりましたけれども、今日本来基調講演で皆さんに申し上げたいと思っていたことが、私のミスで時間配分を間違ったために今補足をさせていただきました。

それでまず、この後皆さんのご質問を受けますが、あらかじめ頂いている質問もございま

すから、まず皆さんの質問を受けましょうか。それでもし時間が…頂いたものにはできるだけお答えしますけれども、まず皆さんのご質問を出していただいて、それでちょっと意見交換をさせていただければと思いますので、ちょっと司会をお願いします。

（進行役）　はい。では高橋先生、ありがとうございました。そうしましたらですね、これからワークショップ終了時刻まで約 40 分間ほどございますので、是非積極的に参加いただいた皆さんからご意見を頂戴して、是非先生と通い合った双方向のコミュニケーションをとれる場にしたいなと思います。

（高橋）　そうですね、感想とか意見でも結構です。

（進行役）　はい。

（高橋）　できれば今の皆さんのお立場というか、お名前…簡単な自己紹介をしてからご質問なり、ご意見なり、ご感想を言っていただければと思います。

（進行役）　はい。それではご意見・ご質問等ございます方、よろしければ挙手いただきましてお願いしたいと思います。どうでしょうか。

（高橋）　はい、どうぞ。マイクはいいですか？

（発言者 A）　会社の役員をやっています。女性が子供を産みたがらないとか、自分の中で自己実現とか自分探しだと言われていますけれども、先生が感じるというか例えばデータによって、現代女性というのはどういう事を自己実現したいと思っているのか、その辺の事を何かご意見はないですか？例えば男性と同じ社会的な地位を得たいとか仕事をしたいとか、そういう話を聞きますが、男性自身を見ていてもそんなに特別に有名人になった人が多いわけではないですし、目立ったポストについているわけでもない。でも今まで過去の女性は、子供を育てるという事は自分にとって非常に意味がある事だと思っていたのが、それを敢えて捨ててまで、何か実現したいものが彼女たちに何かあるのだろうか…と言うことなんですが。お願いいたします。

（高橋）　今日ここへお見えの皆さんはどうでしょうか。女性もかなりいらしゃるんですが。今まで女性の役割というのが、家庭で子供を育てるというのが第一義的に考えられて来たんですが、今この共働きの時代になって家庭で子供を出産とか子育て以外にも、女性の自己実現という事が入ってきましたね。そういう女性の考え方の変化ということについ

て、どなたかご意見がありませんでしょうか。お一人ぐらい頂いたら僕のコメントをさせて頂きたいと思いますが。まず女性からぜひご意見をいただければと思うんですけれども。お互いに…私と相互だけじゃなくて、横ゆれと縦ゆれを両方やっていきましょうね。どなたかお願いします。

（発言者 B）　すいません、私的な考えなんですけれども。女性として何を実現したいかよりも、夫婦単位でどれだけ私のことを主人が大切にしてくれているか。それをすごい感じることができれば家庭を大切にする事ができると、私は思います。やっぱり自分自身が主人から愛されていないと思うから、自分の満たされるものを外に求めに行く。それを「自己実現」とかいろいろな言葉に代えているだけだと思うんですけれども。自分自身が主人から愛されていると思うから、愛情を返してあげる。それは別に逆になってもいいんです。自分が主人を愛することで、また愛情が帰ってくる。それと同じ事を子供にもして、それなりに子供からも帰ってくる。だからよけいそういう幸せとか、いろんなものが満たされていくからいい家庭になっていくんだと思うんですけれども。あくまでも自分の意見です。

（高橋）　どうぞ。もう１人いらしゃいますか？こちら前の方。

（発言者・C）　私の場合は母子家庭なので、働かざるをえないというか、そういった環境におりますけれども。やはり「自己実現」という部分でどんな…私はマズローの自己実現というのが凄いあっているなというか、自分ではすごい好きなんですけれど。やっぱり安定欲求とかいろんな欲求を超えていって、初めて自己実現ができると思うんで、対自分が女性だから自己実現がっていうんじゃなくて、もっとやっぱり、その女性達が人としての自己実現を目指せるようになっていけば、下手に男だから女だから…子育ても女だからしなければいけないとか、そういうイメージじゃない方が…そういうふうに持っていくようなイメージを持っているんですけれど。

（高橋）　はいどうぞ。

（発言者 D）　＊＊＊＊＊＊音声が小さくて聞き取れません＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
母親として女性ができること、それはやはり教育を＊＊＊＊＊＊そうじゃないというふうに否定する社会的な背景がありますね。そういうことに対して、幼稚園とか保育所に子供を預けていくことも、荷物預かりですか、そういうふうになってきている要素になっているんじゃないかなと。なぜ子育てをすることが女性にとってすごくプラスなんだって思えなくなってきているんだろうかという疑問なんですけれども。

（高橋）　誰か他に言いたい方いますか？何となくゼミの雰囲気になってきましたが。

（発言者 E）　やはり自己実現の前に経済的な問題というのがあると思うんですね。今どうしても物が充分ありますし、みんなが中流意識がありますので、横並びで同じくらいの生活レベルを保ちたいというふうな 意識が高まってきますと…情報も氾濫していますし。なかなかお金の問題を抜いては考えられない部分があると思うんですね。私は本来はやはり、子供は親が育てるべきだというふうに 信念を持っているんですけれども 、実際問題としてじゃあ「家のローンはどうするのか」「教育費はどうするのか、食べることはどうするのか」様々な問題が出てきますので、本質的な問題にはそのあたりを、完全に育児休暇を子供がしっかり育つまでとれるという社会的な態勢ですね、その間はしっかりお給料も保証するし、母親はしっかり休んでいいと…そういう社会的保障の態勢がきちんと整いさえすれば、いろんな事は解消されていくんじゃないかと 気がするんですね。やはり経済の問題を抜いてはこの問題はちょっと考えられないんじゃないかなと思っております。

（高橋）　この問題は、なかなか根が深い問題だと僕は思っているんですけどもね 。 1つは「男尊女卑」というものが制度や意識の中に残っているという事実はあると思うんです。それで、例えば僕はいつもこういう 言い方をしているんですけれども、「21 世紀は共創の時代だと」。ホワイトボードがないと間違って…。「21 世紀は共創・共活の時代だと」 僕表現をしているんですが 。これどういう 意味かといいますと 「きょうかつ」 というのは 脅しじゃなくて…これが書かないと 脅しと間違えられるんですけれども 。「共に違いを生かしあう」という意味なんですね。共に創るは、これとここから 来ていて、共に誓いを生かしあいながら、補完…自他補完ということが 原理なんですけれども 。よく「共生」と言いますよね。「共生」というのは 自他容認…あなたも 私も認めましょうという 価値観なんですね。男と女をお互いに認めましょうというのが 「男女の共生」 ということで「共生社会」。で、21 世紀はもう一歩先で、男と女が違いを生かしあいながら、長所をいかし合いながら、欠点を補いながら共に新しい秩序を創っていくと。これが 21 世紀の男女共同参画社会だと僕は思っているんですけども 。
こういう事なんですね、今日僕「育」の視点と言いましたが、教育界はすごくイデオロギー対立の激しいところです。それで僕、いつも学生にこういう話をしているんですけれども、尾形光琳の『紅白梅図』と。今日は持ってきていませんが、ハンカチも『紅白梅図』。たくさんの『紅白梅図』を持っているんですけれども 、紅梅と白梅の間に広い川が流れている、紅梅と白梅と見事にバランスを取っているんですね。これが男と女、教えると育てる、父性原理・母性原理…さまざまな対立ということに繋がるんですけれども 。それはバランス棒を持って綱渡りをするような仕事で、長いバランス棒を持たないとどっちかに落ちちゃうんですね。つまりよく最近「男らしさ・女らしさよりも 自分らしさを」と言うんですね。これは両極端を廃する事が大事で、「男のくせに・女のくせに」と言いすぎると問題なんですね。ところがいい 意味での「男らしさ・女らしさ」そのものを否定する動きも

あって。例えば私がビックリしたのが、ひな祭りをやった保育士が辞めちゃったんです。それは糾弾集会が開かれて、ひな祭りは「男らしさ・女らしさ」…女らしさを押しつけているというわけですね。それから富山で聞いたのは、これはある方から聞いたんですけれど「光陽小学校」というところの校歌が「父のような立山連邦、母のような神通川」という歌詞が問題になったと。神奈川県の何とかという中学校…大磯でしたかね、「男の子我ら励まざらむや、おみなご清らかに生きん」とか言うのがあって、これが差別だと言うんで校歌が変わったんですね。それは、いい意味での「男らしさ・女らしさ」というものは、アイデンティティを育む上には大事なんですね。ところが男女平等とジェンダー・フリーというものを混同する事があって…ジェンダー・フリーも様々な意味で使われているから、概念を整理しなければいけないんですけれども。男女平等が求めているのは、要するに男と女が性別によって差別されないという「同等化」というものを目指しているんですね、権利が同等ですよと。ところがジェンダー・フリーの中には、例えば北海道の教育委員会が全道調査をやりましたがね、騎馬戦を男女混合でやっている学校がたくさんあるんです。それから徒競走を、私は３・４年生くらいまではやってもいいと思いますけれど、５・６年生くらいになりますとだいぶ違います、身体能力が。それから中学校でも高校でも、何で男女混合でやらねばならないかというと、ちょっと疑問があるわけです。それは「機会の均等」を目指しているのが男女共同参画なのに、結果の平等という物を求めるところがあって。例えば埼玉でも「男女共学でなければならない」という勧告書が出たんですけれどもね、それはちょっと違うんじゃないかと。求めれば男女共学というところをね、別学でも共学でも機会が均等に保障されるという趣旨ですから。なぜ今この話になっているかというと、１つは経済的な問題がある、これは確かにそのとおりですね。もう１つは、僕この間野球で有名な明徳義塾というところへ講演に行ったんです。先生方が…高知で明徳義塾という野球で日本一にはならなかったかな？他のスポーツでも結構日本一が多いんですよ。そこに行きましたら先生の平均年齢が28歳なんです。そして若い女性がたくさん教師にいるんですけれど、全員子供が３歳までは保障されているんです、家庭で育児に専念することが。全員学校に戻ってくるんです。これは家庭育児が成り立つ働き方を支援している。今共働きの時代ですから、専業主婦に戻れと言うことはもう言えません、時代の流れとして。そうすると、いかにして家庭育児が成り立つ働き方を支援するか。とりわけ３歳までを家庭育児に専念できるように、さまざまな支援・システムを、これはお父さん…父親の支援も含めてやる必要がある。だから本当は、家庭育児を選択するかそうでない育児を選択するか女性の自由なんです。それが公平に支援される仕組みを作るべきなんですね。一昨日東京豊島区というところで講演をしていたら、終わった後やってこられて…保育園の方が。豊島区では０歳児に行政が出しているお金が、月50万だというんです、年間600万。この話を聞いてびっくりしましてね。もし親が、自分の家庭で育てたいと言う人に50万出したら、つまり在宅育児手当というやつですね、こういう発想だっていいじゃないかと。僕は外国の子育て支援を調べたんです。外国の子育て支援は、教育者としての親を

支援するという方針で一貫しているんです。親子が共に過ごす時間と空間を支援する、そして家庭育児が成り立つ働き方をどう支援するかという発想がある。日本の場合は、労働者としての親を支援するという、働いているお母さんがいかに有利になるかという発想が優先していて、もちろんその事もだいじですよ…働いているお母さんを支援することも大事なんだけども、そうでない家庭育児を選択する人にも対等な、支援するシステムが作られるべきですよね。つまり、日本は制度や仕組みの中に、あるいは意識の中にどうしても「男尊女卑」というのがあって、それを変えていくためには、意識改革は必要なわけですよね。ところがそれが、極端にいっちゃうんですよ。それいつも、個人か国家か、私か公か、ナショナルかインターナショナルか…極端にいっちゃうわけですね。戦前は国家・国家と言いすぎた、戦後は個人・個人と言いすぎた。ここをどうやってバランスを取るかという、これを教育の世界では「ホリスティック教育」というのが１つの大きなキーワードなんで。包括的な、両方を統合していく、調和・共存していくという原理ですね。これが「共活・共創」という事だと思うんですが。
だから女性達が、ある意味で確かに制度的には差別を受けました。僕は「補完的進歩」と言っているんですが、今日本の大きな教育改革は、第３の教育改革と言われていて、第１は明治の教育改革。これは近代化を理念として、近代文明にモデルを求めた。第２は戦後の民主化で、アメリカの民主主義にモデルを求めたわけです。この２つは過去を否定して進歩をしようとした…否定による進歩をめざした。第３の教育改革…私達がいまから 21 世紀に開くのは、補完的進歩。日本の良さをしっかりと守りながら西洋の…欧米のいいところは制度として取り込んでいくという、これはなかなか難しい話なんですけれども。例えば日本人は決して、男が女を差別してきた歴史とは言えない面がある。例えば『宝塚歌劇』を男が参加できないと文句いった人はいないし、「レディースプラン」が差別だといった人はいないし、僕がいつも利用している京王線は、女性専用列車というのがありますけれど、これを差別だと…なんで男性専用列車がないんだといった人もいない。そういうことをいちいち目くじら立ててこなかったわけで、「夫婦」というのも「夫」が上だったんです、日本ではね。男が威張っていたようで、あるいは「ロミオとジュリエット」と言いますが、日本は「お夏、清十郎」と言うんです。お夏が先なんですね。決して男が威張っていたわけじゃなくて。『ユネスコ図書館』には一番日本を代表する作品は何が残っているかというと『枕草子』です。これは女性の作品ですね。つまりもし、「男尊女卑」ということが昔から強固にあれば、これが日本の代表作品にはなっていないはずなんで、女性が創った物だからダメだ…とこういうふうになってきたはずなんですね。だから本来日本の文化は、男と女が補完し合って和合していくという文化を作ってきたわけで、それを大事にしながら、しかし制度としてはしくみとしては、意識の中には男尊女卑がまだ残っているから、それを変えていく…これは綱渡りのような仕業なんですけれども…それをやっていく必要がある。だから「女性の自己実現」という事を、女性のいい…つまり、男は産めないですよね、授乳することはできませんよね。そういう、「産み育てる」という性のもっている、これは

是非、僕が労働組合に頼まれて女性団体で後援している時に、犬飼道子さんという人が『中央公論社』から出している中公文庫で『男対女』という本を読んでくださいといつも 言っているんです。この方は国際派の女性で活躍している方ですけれども、こういう事を言っているんですよね「思えば命を体内にはらみ、日々新しい人間をっひとり世に送り出し、その人間を育て上げる。日々食べさせて生きながらえさせ、内的生命をも開花させるということのなんと恐ろしいまでの仕事であることか」と。というつまり、女性の素晴らしさですね、女性の良さですね。だから差別的な物もある。差別することと区別するということの、ここを混同してはいけないんで、差別はできるだけ取り除いて行かなければなりませんが、男女の区別そのものを否定するような誤ったジェンダー・フリーは間違いなんで、そこの所をきちっと区分けしていくことの作業が、今必要なのかなと。こう言っていますね。「女性的なるものの、命に近く命に触れ命を育む使命というものを、もっと感じてもらいたい」と。これは男女平等という法の論理ではなくて、もっと男と女の違いを生かしあうという意味で、それは差別ではない。男と女の違いというものは、それが差別だと発想してしまうと、「じゃあ、全部なくしてしまおう」ということで、騎馬戦も一緒に徒競走も一緒にというふうになっちゃうんで 、それはちょっと違うんじゃないかと。だから僕は、そういうふうな男女の区別までも否定するようなジェンダー・フリーは男女共同参画に反すると、男女平等に反すると。真の男女共同参画は「共創・共活」違いをいかしあって、和合し合って、補い合っていくことだと。ちょっと長い話になりましたが。
１つでこんな長い話になりますので。どうか。他にございましたらどうぞ。思いがけないことが起きました。他にありませんか？何でも。

（発言者・Ｆ ）富山経済同友会で教育問題の委員長をやっておりますけれども 、家庭教育を中心にずっとやってきて。中学・高校と課外授業なんかもやっていますけれども 、その中でなぜ家庭教育を取り上げてきたかというと 、我々企業になりますけれども 、やはりいい社員は学校ではあてにできないし、詰まるところ家庭だろうと。挨拶ができない、礼儀が悪い、そんなような子が新入社員で入ってくるわけですけれども 、これを学校に求めてもしょうがないだろうと 。元々は家庭だろうと思うわけですね。ところが、先生もおっしゃったけれども、＊＊＊＊＊音声が聞き取れません＊＊＊＊＊むしろ、私らの恥を晒すようようですけれど、「これが結婚するの？これが親になるの？どんな子になってしまうの？」あるいは、世間に「幼児虐待」だとかというと 、どうしてこんな親が、どういう育ち方をしたんだろう 。そういう親をまず変えなきゃいけないわけですけれども 、その親が出てこない。これは一体どうしたらいいか、「場」を作ると…その場にも多分出てこないでしょうし、どうしたらいいでしょうという事が一番の課題であります。

（高橋）　「弱音や愚痴を語り合う会」というのを、僕細々と始める事がスタートかなと思っているんです。これは教師も一緒なんですけれど。「師範塾」は本当のリーダーを育て

るエリート養成をやっていますが、一方で悩める教師に集まっていただいてうまくいかないという話ばかりやって、これは気が合う校長先生がいた場合は「失敗事例研究会」というのをやっているんですね。温泉に行って酒を飲みながら、うまくいかないという…まさに学級崩壊しているとか、不登校児をなかなかうまく…無理だとか。最近はＡＤＨＧだとかＬＤ児に対する関わり方がうまくいかないとか…いろんな悩みがいっぱいあるもんですから、弱音や悩みを語り合う会と…名称はどうでもいいんですけれども、その子育てに悩んでいる親が、弱音や愚痴を自由に話せるという場を作って、それを口コミで広げていって呼んでくる以外にないのかなと。それでもなかなか来ませんけれども、本当に必要な方はですね。ただそれをやると、少しずつ口コミで広がってきて、例えば「親学フォーラム」を１回目にやった時、もの凄い質問がありましたよね…たくさんの。ここで言っていることは皆さん大体わかるんだけども、具体的にどうするかというと、具体的には本当にたくさんの問題がある。例えば僕は不登校の問題を専門的にやっていますけれども、不登校児に対してどう関わっていったらいいかという具体的な問題はたくさんありますよね。具体的な問題になると、みんなが結構切実に悩んでいることをだーっと出してもらって、そこでどこで壁にぶつかっているか、どうしたらいいかということを１つ１つ答えて行かなくちゃならないので、まずその悩みを全部出していただく。そういう場を、例えば何ヶ月に１回か、まず作る。そこに行ったら、いろんな話ができるよということで広げていくことが、最初のスタートかなと思うんですが、それできないですか？難しいですか？実行可能性はどうでしょうか。僕はなかなか来ていただけない方は、そこからスタートを私用というふうに考えているんですけれども、現実にこの富山でそういうことは難しいでしょうか。皆さんの中に、なかなか集まってこない方をこうしたらいいじゃないかという、アイディアがある方どうぞ意見を言っていただければありがたいんですけれど。そうしたら、先生後ろにいらっしゃいますから、是非富山で実行していただけるんじゃないかと。
どうでしょうか、どなたかご意見ございませんでしょうか。これ一番の問題です、本当に。あるいは、そうですね。悩みと言っても来られない人はインターネットもやりませんよね。悩みを匿名でインターネットで書き込むなんて事を。そうすると、それを答えていく方が大変なんですけどね。はい、どうぞ。マイクをお願いできますか。

（発言者・G）　ヤマザキと言います。教育関係でも何でもないんですけれど、子供のスポーツを指導していまして、幼稚園から小・中・高校生くらいまでやっているんですけれど、その練習場所に子供だけ置いて、親はさーっと帰っていく人が、やっぱりいるんです。熱心な人はやはり一緒に練習を見たりとか、例えば練習が終わった後に「うちの子はどうですか？」とかそういうふうに聞いてくる親と、全然…自分の子はうまいのか下手なのか、他の子と比べてどうだああだとか、全然思わない親もいるんです。ただここの場所に何時から何時まで連れてきて、あと何時になれば迎えに来て、さっと…挨拶もしていきませんよね、親のほうも。挨拶がどうのこうの感謝とかは自分らは別としても、せめて「ありが

とうございました」とか「今日はよろしくお願いします」とか、その一言の挨拶もない親が結構いるんですよ。何とか親同士が仲良くなっていかないと、こういうスポーツにしても勉強にしても、何でも課外活動…いろいろな事があると思うんですけれど、親同士がまず仲良くならないと、親と親の…言い方は悪いんですけど「派閥」的なそういうのが出てくるんですよ。何とか子供達を仲良くさせて…バーベキューをするから親に食材とか準備の手配とか…なかなかそういうふうにやってもらうとか。あるいは忘年会とか新年会とか、子供の何かそういうふうにして親の親睦を図ろうと努力はしているんですけれど。似たような悩みもこっちもあるんですけど、何とか親に顔を出してもらうように頑張っているんですけれど。いろいろ、親学については今日これで２回目なんですけれども、いろいろ喋りたいことがあって、口下手で申し訳ないんですけど、そういう小さい所から始めていかないと、これはなかなか難しい。ほんの小さいところから始めていかないと、やはりなかなか難しいんじゃないだろうかと 思います。今ちょっと自分も悩みながらやっているところです。

（高橋）　ありがとうございます。あらかじめ質問を頂いた中に、H さんいらっしゃいますか？ああ、いらっしゃいます。H さんから出していただいた中にも、例えば「愛情不足の親が変われる最初の一歩に必要な力は何でしょうか」とか、それから「子のために変わりたい親の１人だと思っているんですが、変われないのは何が…何かが不足しているからでしょうか」と、こういうようなご質問があるんですけれども。何かご意見がございますか？あるいは補足してご質問いただいてもいいんですけど。

（発言者・H）　ありがとうございます。Hです。私は思春期の子供でつまずいていたんです。「親学フォーラム」はその時に上司が「こういうのが新聞に載っていたから、あなたにも力になれるんじゃないか」ということで教えてもらったのがきっかけで、今回３回目になります。その時までは仕事をしていたんですけれど、２年前から仕事を辞めて、家で子供と一緒にいる時間を長くしたんですけれども、その時に病院の先生からは「今家庭に戻っても、それが決してプラスになる」とも言われなかったんです。だけど少しでも、子供に必要な時にずっと仕事をしていて、自分では子供を見ていたと思っていたし、子供は親の背中を見て育つものだから、自分がやってきたことはある程度子供が見てくれていると思っていたんですね。子供の育て方が間違っていたと、その時点で気付かされたので、自分というものをちょっと 考えてみたんです。それでいろんな本とかも読ませてもらって、いろいろと勉強してみたんです。そしたら、自分が子供を可愛がって育てていない、愛情を持って育ててなかったということが、すごくわかったんですね。自分が子供に愛情を持っていないということは、生活していく上でそんなに大変だとは思っていなかったんです。主人がいて、子供がいて、母がいて…その生活の中で、自分が仕事をして、自分の母に自分が子供の立場で、親の立場としての子供を見ていなかったというか。ちょっと言ってい

ることがわかってもらえるかどうかわからないんですけれど 、結局自分が子供の立場から…同じ子供を見て、子供も自分と同じ目線で、結局自分が親なのに子供にそういう…育てることに意識してしまって、一緒に子供の感性と言うか喜び…一緒に感じて、関わり合ってこなかった。仕事は外で一生懸命して、そればかり…責任ある仕事だったと思うし、自分の仕事は自分の仕事に誇りと責任を持っていたので、絶対失敗してはいけないというのがあって。家が子供と一緒で休むところでもあるんだけど 、自分が休むために子供の夜泣きとかそういうのが、すごく不愉快で。子供は親の所有物ではないんだけども 、親の言うことを聞いていれば、子供はそれなりに充分育つと思って、そういう考え方でずっと来ていたものだから、自分はそれなりの育て方はしていたと思ったんだけど、その中に愛情というものがなかったことが 、すごく大きなものを感じました。その事で、いざ自分が愛情をやりたいと思っても、愛情をもらってたのかどうか 、その愛情がわからないっていったらおかしいんですけど 。前の時に先生は、愛情というものはいろんな人にもらって、いろんな人からもらえるという 事だったんですけど、こういう時に子供を外に出して、いろんな所へ連れて行っていろんな 人の愛情をもらわせる時に、外に出せない。思っているのとちょっと話が自分でもわからなくなってきたんですけれど 。そういうふうに、もらえてない愛情をどういうふうにしてやればいいのかという …どういうふうに 尋ねればいいかわからないんですけれど、その関わり方、愛情の捉え方というのもある 様な気もするんですけれど。子供にやりたい愛情はあるんですけれど、やり方がわからない。親が変われば子が変わるといわれても 、その親が、今までの経験の中で何もしてこなかったわけじゃないんで、それなりにやっていたと 思う中で子供が我慢と言うところが多かったというか、子供に我慢させてきた。最近ちょっとわかってきたのは、向こうからベタッとくっついてくる。そういう時に、抱きかかえればいいと 言われるんですけれど、反対にそれもできないんです。寄ってこられたら何となくはねつけるというか…嫌なんです。

（高橋）　それはどうして嫌ですか？

（発言者・H）　何かわからないんですけれど、そういうところが一番じゃないかなと。「こんな大きくなって、なにこれ」って。そういうのが一番なんだと思うんだけど。

（高橋）　そういう方は、ほんとうはとっても 多いんですよね。もう中学生になっているのに、本当に小さい子のように甘えてくるのは、気持ち悪いとかね。でも本当の甘えとか依存という大事な時にそれをしていないと 、それはずーっと続くんですよ…何歳になってもまだね。だから今日、僕Ａ少年の話とか佐世保の話をしましたけれど、その満たされなかった甘えとか依存とかっていうことを 取り返すために、長い年月をかけて基本的な信頼感・安心感というものを取り戻すために、ひょっとしたら中年になっても 母性を求めている…例えば飢えている 場合ですよ。それは年齢と関係なくですね、ましてや中学生がそう

やって甘えて来るというのは、まだ本当に抱きしめられる事が足りなかったからであって、それを求めてきたら「変だなあ」と思わないで、抱きしめてやるということが …年齢は関係ないです。

（発言者・H）　それが愛情の表現なんでしょうか。そうしたら。

（高橋）　まず、そういうことが必要ですから、それはまず抱きしめてあげるということから始められることが大事ですよね。だから「年齢としてふさわしくない」というのは、これはちょっと冷たい心で。だから子供が求めている…甘えるとか依存するとか反抗するということを、マイナスと受け止めないことです。甘えることや依存することや反抗することは、成長するために絶対必要な、不可欠なことなんです。健全なプロセスなんです。ところが、甘えることや依存することや反抗することを、何かとんでもないことだと マイナスに受け止めると、心の中で拒否反応が起きてくるんですよね。でも、甘えること・依存することは大事なことで、適度に甘えていること・適度に依存していることが「自律する」ということなんです。甘えないことが自律する事じゃないんです、依存しないことが自律する事じゃないんです。だから特に、小さい頃にそれができていないと、それを引きずって、ずーっと中学生なっても高校生になっても甘えてくるということがありますから、それをしっかり抱きしめるということをしないと、まだまだ続きますよ。それでいいですか？そろそろもう時間ですか？
私のところには、虐待しているお母さんがたくさん来られるんですけれど、お話をしていますと今日のお話でいえば、コーディネーターの方が「自分を振り返る」ということをおっしゃました。「内省体験」ですね。自分自身がどう育ってきたかということを振り返りながら、気付いてみたらもう手がバーッと動いていて、はっと我に返って「何でこんな事をしているんだろう」。その自分自身はどう育ってきたかということを振り返ってみる。そういうことを、自分自身を振り返りながら、自分の心を見つめていくと。これもある意味「自分探し」かもしれないんですね。それをしっかりしていく事からしか始まりませんので。
もともと経済同友会の教育委員長からのご質問から始まったんですけれども、今子供の問題で悩んでいる親はたくさんいますけれど、まずそういう親たちもある意味で「受容する」というところから始まらないとスタートしないんです、「親学」も。だからまず、「こうあるべきだ」という事を言う前に、しっかりとその人達が持っているトラウマの問題だとか、さまざまな心の傷とかそういったことを受け止めた上で、同情するだけではダメなんで。じゃあそこからどうやって変わっていくかという…最初は受容する段階から…これもまた「しっかり抱いて下におろして歩かせろ」ということと同じかもしれませんね。どうしてもまず最初の段階で、受容するという場がないと、何となくあったかい雰囲気の場がないとなかなか来づらいという雰囲気があると思うんですね。ですから、何となく悩みや弱音や愚痴を…至らない自分をさらけ出せる場を地域でどうやって作りだしていけるか。そこ

をまず工夫していただいて、しかもそれがただ同情されるだけじゃなくて、受け入れられるだけじゃなくて、そこからもう一歩変わっていける何かを学べるような…自分が変わっていけるようなヒントを与えられるような、そういう場に積み上げていく。そのためにはやはり、毎月のような集まりがないと。これは、『経済同友会』がかつて「学校から合校へ」という提言をなされて、合わさる校ですね…「合校」。基礎・基本教室 、体験教室、自由教室…そういう物を地域社会に作っていこうという話が出ましたね。みんな賛成したんです。ところが一歩も前進しなかった。そこでもっと親の意識を変えなくてはならないという提言を経済同友会が出されたのが、大変僕印象に残っているんですが。その親の意識を変えていくためには、今言ったような地道なそしてねばり強い…そういうあったかい、温かい心を育てるという場を継続していくこと。これは大変な努力が必要なんですけれども、それを是非この「親学フォーラム」をきっかけに、私も全面的に協力をしますので、是非育てていただければと思います。
時間を超過しておりますので、とりあえず以上でよろしいでしょうか。ありがとうございました。

（進行役）　はい。それでは、高橋先生どうもありがとうございました。そうしましたら、この「富山親学フォーラム」今回で３回目ですけれども、このようなワークショップという意見交換の場を設けさせていただいたのは昨年度からで、今回で２回目となっております。それで時間の制約等もございまして十分ではなかったかもしれませんけれど、今回このように皆様からいろいろとご意見をいただきまして本当によかったなと思います。先生がおっしゃいましたように、地域でどのように、こういった場を設けていくかということを私ども主催者の『浦山学園』としても今後より一層考えて行きたいと思いますので、また今後ともどうぞよろしくお願いいたします。今日は皆さん、どうもありがとうございました。